

シベリア雑感（北朝鮮にて）

岐阜県 丸山清公

昭和二十一（一九四六）年六月、ギードロより病人として日本に帰るため、カピョール駅に到着し列車を待つ。間もなく病人専用の列車が到着した。全員、病人とは思われないような元気な姿に見えた。日本に帰れるのだとの思いで上の空となり私の目を錯覚させたのであろう。この列車は、各方面よりの収容所の病人を集合させた部隊で、アバカン地区が多かったようであった。

乗車して、食事受領に行くときに各車両を見て驚いた。足のない人、手のない人が余りにも多く、シベリアでのひと冬が厳しかったので、おそらく凍傷であろうと推察した。

列車は全車両二段装置とし、各人新品の藁布団でゆったりと横になって寝ることができた。また

この列車の中ほどには炊事車両をつけて、時々駅に着いた折に食事を貨車の乗員人員で受領し、貨車で楽しく食事したり寝たりして、故郷の思い出を語り合った。車外のシベリアの春の風景を眺め、語り、楽しみながらの移動である。今までの生活を思えば余りにも差があつて、今度は本当に日本に帰れるかなと思つても、今までのソ連の仕打ちからして不安がこみ上げてきた。しかし皆、本当に元気であつた。

シベリア鉄道を東に向かうとき、とある駅に停車中に日本兵の乗った列車が入つて来た。とても元気そうな兵隊ばかりであり、「どこに行くんだ」と尋ねて来た。「我々は日本に帰るんだ」と言うのと、「帰れるもんか、我々は朝鮮から来たんだ。これからシベリアへ行くんだ」とのこと、
「また騙されたか」と思いつつ汽車はどんどん走りハバロフスクを通り、ポセツト湾に着いた。ここでソ連の貨物船に乗せられ、帰国と思つたが、着いた所が北朝鮮の清津港であつた。

清津より汽車にて旧満州の方向の会寧に向かい、途中の古茂山に到着し、ここが落ち着き先となったようであった。思えばギードロをダモイと違って出たのが昭和二十一年六月であり、七月には北朝鮮の古茂山に來ているが、今まで騙されづくしであり、それでも日本に近い所まで来ただけでも多少の慰めとなっていた。

古茂山で、旧日本のアサノセメントの社宅、寮、学校と思われる所に収容所されることになった。病人が優先で、比較的健康な我々は屋根つきには入れなかった。元運動場に八畳程度の穴が掘ってあり、側面には粗末な石が積まれ、屋根は形のみで非常にお粗末で、寝泊まりするような所ではなかった。

近くで木を切り出し、屋根に組み、我々の持参した天幕や毛布で下地を作り、この上にアカシアの木などの落葉樹で覆い、その下で寝た。雨でも降れば雨漏りで地面に水が溜まり、一晩じゅう寝ることができず、立って一晩を過ごすこともあつ

た。

入浴はセメント工場の浴場を利用し、近くの送電線より電気を引いて沸かすようにできていたが、この装置は収容所になってから日本人の電気技師が作ったそうで、本当にありがたく思った。一年ぶりに日本式の入浴ができて皆満足そうであつた。

古茂山での作業は、石灰岩の山から原石を木馬で工場に運ぶ運搬路の整備ぐらいのことであり、仕事もなく病人が多く遊んでいるのを見かけた。

しかし、食糧は馬糧のトウモロコシであり、ほとんどの兵隊が腹を壊し、こんな収容所におれば体が参ってしまうと思ひ、どこか良い作業があればと健康な者は他の収容所に行きたがつていた。ここはどうも一時的な収容所で、それぞれ必要な作業が生じた場合に、ここから必要地に送り込む中継地点のようであつた。

一週間もたったであろうか、使役のため清津港に向かった。作業隊の編成は佐藤中尉が隊長で、

その下に宮崎少尉が付き総勢六十人前後であった。この作業班は不用物を海に捨てる作業だった。

日本の三菱造船所跡地の波止場から汽車で運搬してくる物資を船に積み込み、午前一回、午後一回の計一日二回であるが、沖に出ると波が荒く、船酔いする人もあった。

食事は三食、米のご飯で副食も良く、皆徐々に体力もできて元気になり、仕事も順調に進み約一カ月で全作業を終了し古茂山に戻ることにした。汽車で戻る途中、列車の都合上大きな操車場（地名記憶なし）で一泊することになり、操車場内の客車（座席なしの廃車と思われる）で泊まることとなった。その折、駅との連絡では、この客車は使えないので動かさないし、また入換えもしないとのことであった。

夜中の十一時過ぎであろうか、突然、連結作業で客車が大きく移動した。我々はびっくりして外に出た。隊長は、線路に寝ていた者はどうかと心

配して直ちに点呼を取ったが、六人が客車の車輪に毛布ごと巻き込まれ犠牲となった。付近の現地人が朝現場に来て、我々の不始末をなじり、罵声を吐くのには余りに耐え切れないものがあり、敗戦国の惨めさをここでも痛感した。

古茂山に戻ると、今度は収容所に文化部ができていた。部内に新聞班と演芸班の二班あり、また収容所には多くの中隊もあったので、連絡が必要であった。要員として佐藤中尉の作業隊より一人出してくれとのこと、佐藤中尉と宮崎少尉よりそちらに行くように言われ、到着と同時に行くことになった。

文化部の新聞班は壁新聞を作り掲示板に掲示し、またソ連発行の「日本新聞」を収容所内の各隊に配布することも役割の一部で、編集員は四人と記憶している。演芸班は演劇のできる者、楽器演奏のできる者、浪曲、歌手等の経験者で約九人の演芸一座ができていた。

文化部長はロシア語の通訳である黒野少尉（海

軍)で、新聞班の長も兼務していた。演芸班は秋田少尉(八丈島出身)であった。新聞班は收容所内での仕事であったが、演芸班は遠く朱乙しゅおつや近くの收容所にトラックで慰安に行った。皆とても喜んで、捕虜としてできる限りのもてなしをしてくれた。今でも思い出すのが、松茸をいやと言うほどご馳走になったことである。

このように過ごすうちに、いよいよ本格的に帰国命令が出て、十二月中旬、古茂山を後に清津經由興南港へと向かった。車両編成は、我々は本部のためソ連軍兵士と同じ車両となり、興南に向かつて列車は進行していった。

本部車両にはソ連兵五人と日本の古茂山收容所の長である長谷川大佐(軍医)と黒野少尉外八人で、その中に父親の付き添いで、満州より引揚者の女性二人がいた。

羅南駅で長く停車しているとき、ソ連兵が酒を飲んで来て、貨車内で炊く暖房の薪を所かまわず投げつけてくるので、同僚のソ連兵が押さえよう

としても力が強く、どうすることもできず困っていた。一人のソ連兵が将校を呼びに走ったが、間もなく将校が来てビンタを四、五回くらわすと静かになり寝てしまった。

薪を投げつけている間、このソ連兵は「お前たち日本兵は、帰ったらアメリカと一緒にになって我々をやっつけに来るだろう」と口走っていた。我々の方は二段装置の下に女の子二人を入れて、男全員の防寒具で身を守り、薪が飛んでこないようにしていたが、酒に酔っているので難なきを得た。

朝、列車が進行中にこのソ連兵は目を覚ました。昨夜の記憶はないらしく、同僚の兵士に聞かされて、頭を搔き搔き我々に謝ったが、日ごろはとてもおとなしく無口な兵士であった。

興南港に到着し、波止場で乗船者全員による「スターリン元帥万歳」と「天皇制打倒」を言わなければ帰さないのです、そのようにして乗船場に向かつて行った。船尾には日の丸が揚がり、「信

洋丸（字に自信なし）」と記され、日本の船であろうと思ったが、船員を見ると長髪であり、現地の朝鮮人が皆長髪のためまた疑い、船員に「この船は日本に行きますか」と尋ねると「間違いない日本は佐世保港に着きます」と言った。これでやっと帰れる実感が湧き、思わず嬉し涙が頬を伝わり止めようもなかった。

この船には地方人の女子供も一緒であり、皆、喜んで泣いていた。昭和二十一年十二月三十一日、ドラの音高く響く興南港を後に日本に向かつての出港であり、捕虜生活の終わりでもあった。後で知ったが、我々は最も早い帰国組であり、佐世保に上陸した。

五七飛大からの同年兵の早川君は、ギードロも北朝鮮も一緒に今でも交際している。

現在は家族にも恵まれ、市の遺族会長を務めるとともに、全抑協の岐阜支部理事としてご奉公させていただいております。

心残りには、古茂山に眠る戦友の墓参りに行きた

いのですが、これは叶わぬ夢のようです。

シベリア抑留記

愛知県 中村 恒夫

一、出生から入隊

長野県飯田市で生まれた。長野県立飯田商業学校中退（現 長姫高校）

製菓業従事

昭和十七（一九四二）年～十八年（二年間、徴用にて三菱重工業名古屋航空機製作所第二工作部工務課勤務）

二、ソ連軍侵攻前

昭和十九年徴集、個有部隊号、第一斐徳陸軍病院―通称部隊号、満州第三四八部隊

満州国密山県斐徳地区

衛生部員のため、九九式短小銃 陸軍衛生兵